

## 旧植田家住宅現地説明会

森 隆男



皆さんおはようございます。ご紹介いただきました、森でございます。私自身は実は建築が専門ではありませんでして、普段の暮らしから日本の住まいを研究するという民俗建築学という分野で勉強しています。今日は皆さんに内部をご案内しながら、この家でどんな暮らしが行なわれていたかということを感じ覚的に体験していただこうと思います。

植田家の歴史につきましては、八尾市教育委員会の方で作っていただいた資料をご覧くださいと思います。この植田家の建物は明治あるいは江戸時代の終わりの可能性もあるのですが、おそらく明治のごく初めに建てられたものじゃないかと思えます。植田家は、普通の農家あるいは庄屋ではなくて、会所と言いまして、この地域の寄り合いの場所であったり、あるいは役人との連絡をする場所という、一種の役所的な性格の部分はこの住まいの中、建物の中にもっています。そういった公的な部分と、一方でこの地域のいわゆる農家の暮らしというものをしっかりとこの建物の中に残しています。その違いをぜひ皆さんに感覚的につかんでお帰りいただけたら非常にうれしく思います。よろしくお願ひします。

早速ですが、皆さんに、役所としての植田家においでいただいたということで、これからご案内したいと思います。こちらからどうぞお上がり下さい。一段低くなっている部分がおそらく受付であったり、簡単な事務処理を行うところだったはずですが（【写真1】）[A落床；※ p.13「植田家見取図」参照、以下同様]。



【写真1】落床

さて、この家は先ほど申しあげましたように、公的な空間をしっかりと作っているんですね。それは長屋門から入ってきまして、当時でいいますと侍身分の客があった場合は、そこの土間ではなくて、一段高くなった段がありますね、ここから上がります。これは式台と申しますが、こちらから比較的身分の高い客が招き入れられます [C式台]。それからここに松竹梅の飾りのある欄間がございまして、こういうものでまず丁重に迎えられて、次に進むと控えの間、さらに通過して奥の方に進んでいきます。先ほどの式台から、控えの間を通過してこの部屋、ここでおそらく事務的な仕事が行なわれたんじゃないかと思えます。ですから、ここはどちらかといいますと、ご覧いただいたとおり、事務所的な、オフィスのような部屋となっております（【写真2】）[C座敷2]。



【写真2】座敷2

さてその上でさらに重要なお客さんをもてなすというときにはどのような対応をしたかと申しますと、次はこちらまで移動するわけです。どうぞ一番奥の部屋までお入りください。せっかくですから、最高の客のもてなしを受けたつもりでお座りいただけませんか。先ほどの、どちらかとい

まずと、殺風景な事務所のオフィスのような部屋に比べまして、この部屋は全く様相が変わってまいります。先ほど、この家が公的な空間を非常に大事にしていることはお話いたしました。それはどういうことかといいますと、いわゆる武家住宅の様式というものは室町時代に成立するのですが、武家住宅の一つの考え方として、玄関、出入口から出来る限り遠くの、一番奥の部屋を最高の部屋として整備をするということがあります。ですから、先ほどご案内した式台から一番奥のこの部屋まで招き入れるということで、最高のもてなしをしていることを示しているわけです（【写真3】 [◎座敷1]）。その上でこの部屋をご覧いただいたらわかると思いますが、金の襖ですね。違い棚に床の間、それから欄間をご覧ください（【写真4-1】～【写真4-3】）。茶臼に茶碗、茶釜とか、いわゆる数寄って言うんでしょうか、この欄間にはおそらくこの家の当主の考え方や好みが見られていると思います。先ほど高橋先生からご助言いただいたのですが、もしかしたら大坂欄間かも知れません。このように非常に凝った欄間が作ってあります。ここで、最高のもてなしを受けることになります。



【写真3】座敷1



【写真4-1】座敷1の襖



【写真4-2】座敷1の床の間と違い棚



【写真4-3】座敷1の欄間

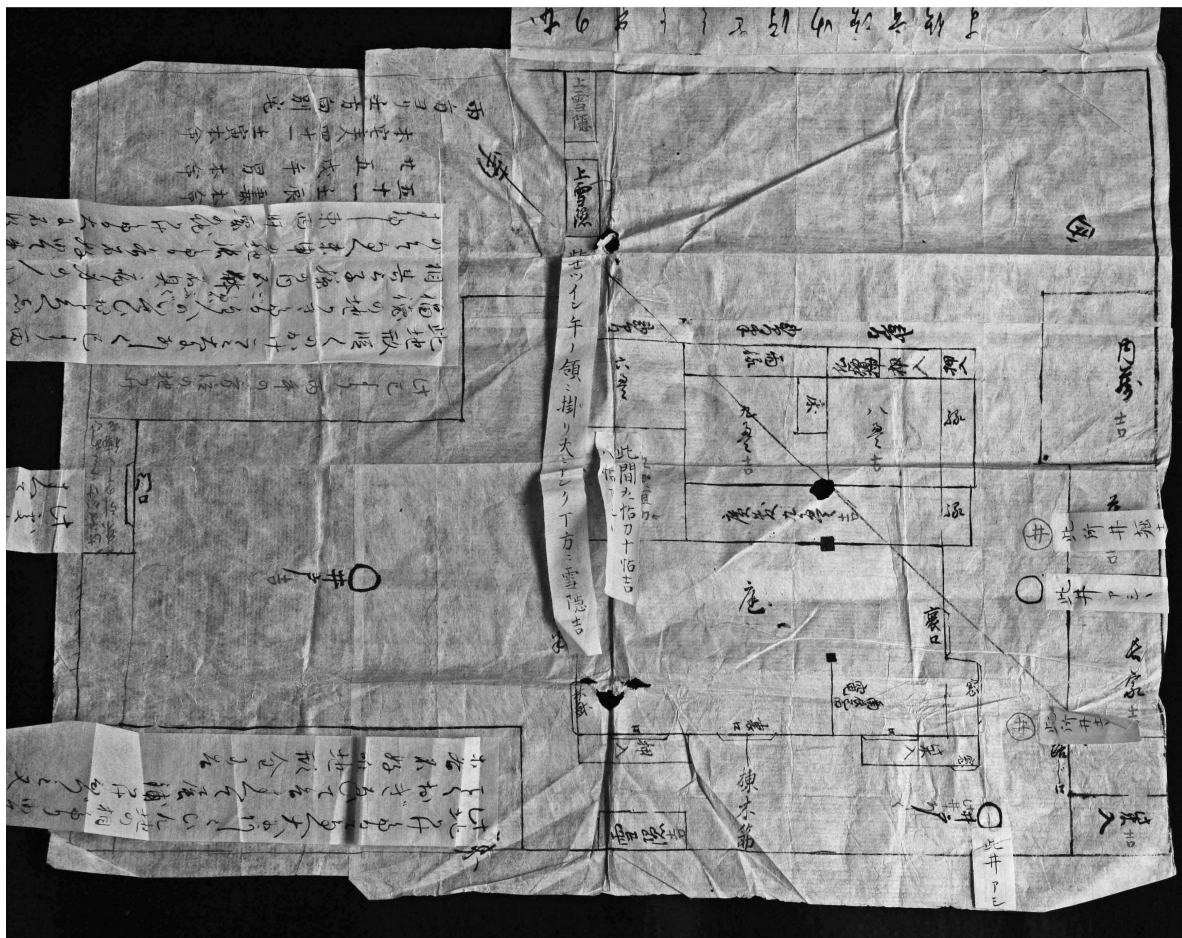
この部屋で最高の席はおわかりでしょうか。床柱を背にした場所が、最高の席ということになっております。おそらくこの家の当主は、客に床柱を背にして座らせて対応するという形を取ったのだと思います。このような当主と客の関係が成立するのは、実はこの部屋だけなんです。他の部屋で客を迎えたときに、客を奥に座らせることがあるんですが、それはちょっと逆なんです。つまり出入口に近いほうに客を座らせまして、対応するのが正式です。正式な客がここに至って初めて、当主と客の位置が逆転して、客が床柱を背にして座るのが、武家社会に起源をもつ作法だと思えます。それがこの家ではしっかりと作り上げられているということがわかります。おそらくそこでごちそうなどを出しながら、立派な庭を觀賞してもらったのでしょう。以上植田家の一つの特徴とし

て、公的な空間というのを非常に大事にし、その機能をきちっと考えて部屋を配置していたことを説明いたしました。

今度は逆にこの家で普段の生活がどのようなであったのかということを経験していただきたいと思います。まず、この家の家相図をご覧ください。文政5（1820）年前後の家相図なんです、大坂の心齋橋に住んで家相見をしておりました井上主殿鶴州が作成したものです（【写真5】）。当時比較的有名な家相見でした。この人が、この家の新築および改築にあたって、文政5年は午年なんです、午年に普請に着手すると当主は殺されますよ、妻子は滅ぼされますよ、と警告しているのです。それでどうしたらいいかという、来る未年、つまり文政6年の3月に普請に着手するよう指示したものでございます。この家相図というものは、「暴れん坊将軍」の番組で皆さんもよくご存じの徳川吉宗が、鎖国体制の枠の中で中国の書物を積極的に輸入するんですね。その流れの中で中国の風水関係の書物が日本にたくさん入っ

てまいります。それを勉強した人達がいわゆる家相見という、一つの職業を成立させていくんです。ちょうど文政5年というのは、家相見が作った家相図が出てくる比較的早い段階に当たります。それがここにあるということ、しかも、当時大坂で有名な家相見が作ったものがこの植田家に残っていたということで、非常に面白い資料だと思います。それでこの家相図を見ておきますと、皆さんが入ってこられた長屋門が古くからあるように思われるのですが、この家の前の建物では逆の位置にありまして、現在の長屋門側は裏口であったことがわかります。出入口が逆転しているんですね。家相図というのは、間取りの歴史をさぐる上でも非常に貴重な史料になります。それがこの家には数枚残っております。ですからこの家がどのように形を変えてきたかということも、家相図を通じて研究することができるわけです。

そうしましたら、土間の方へ移っていただけますでしょうか。土間がこんなふうに広がっているのですが、中ほどにある格子の建具は結界と申し



【写真5】 文政5年前後家相図

まして、土間を表側と裏側にきちっと分ける装置なんです [㊦結界]。客は基本的にはここより奥には入りません。接客の場は結界までで完結をさせていただきます。家族とか、ごく親しい村の人だけが、ここから向こう、つまり日常の生活空間に入ることができます。河内・摂津・大和の農家には結界と呼ばれる表側と裏側を分ける建具がございました。これがはっきりとこの家にも残っております。植田家が、この土間から奥の部分にきちんと農家としての役割・機能をもっていたことが、これから入っていただいたらわかると思いますので、どうぞ奥にお入りください (【写真 6】 [㊦玄関ウチニワ] )。

さて先ほど、結界を越えたいわゆる裏の日常空間が、摂津・河内・大和の農家として典型的なあり方を示しているというお話を致しました。その一つがこの一段低い板敷きの部屋なんですね。ヒロシキというふうに一般的に呼んでおります。ここが家族あるいは使用人が食事をする部屋です。忙しいときには、上がり框に座って食事をしたんじゃないかと思えます (【写真 7】 [㊦勝手ウチニワ] )。



【写真 6】 玄関側ウチニワ

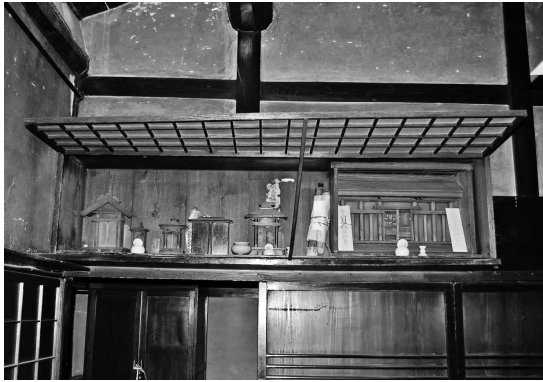


【写真 7】 勝手側ウチニワ

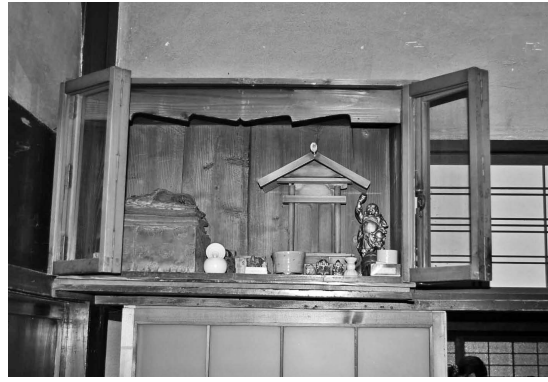
そこには、かまどがございます。これは新しいかまどですが、家相図などを見ますと、かつてはアーチ型をした五穴のかまどがございました。ここでどのような食生活がおこなわれていたのかといいますと、茶粥が主食でございます。茶粥といえますと奈良の茶粥が有名ですが、河内も摂津もやっぱり農家では、主食は茶粥です。冷たいご飯ができたりしますと、その上に茶粥をかけて食べるということもあったみたいですね。そして副食は、たくあんを漬けたコウコ、漬物ですね。それからドブヅケという言葉は地元の方はたぶんお聞きになったことがあると思いますが、ナスとキュウリを糠に漬けたものです。このドブヅケが副食です。それからおかずを作る場合は大根が材料の中心になります。大根の煮物、大根の汁、大根の漬物と、大根をたくさん使っていたということが報告書に出てまいります。

私たちに現在いろんな所から食材がやってまいりますけど、植田家も含めてこの河内ではおそらく、近くでほとんどの食材が手に入ったんですね。例えば、お米はもちろん、野菜は畑でサトイモとかいろんな野菜が手に入ります。それから、動物性のタンパクも、川とか池でフナとかモロコ、カワエビ、タニシにシジミ、こんなものが食材として使われております。果物も、イチジクとか葡萄とか柿とか、結構豊富な果物がこの屋敷のまわりで作られております。僕はちょっと記憶があるんですけどね、タニシなんかは非常に貴重なおかずになったんですね。タニシの味噌和えなんていうのは秋祭りには必ず作ったみたいです。田植の後、半夏生という夏至の日から 11 日目の日には、この地域では必ずタコの酢の物を食べたということが記録に出てまいります。タコは吸盤でピタッとくっつきませんが、苗が田にしっかりと根付くという、一つの俗信でもあったみたいです。そういう調理で重要な役割を果たしていたのが、そのかまどということになります。

もう一つ皆さんにこの家の特色として私が是非挙げたいのは、いろんな神さまがたくさん祀られているということです。先日 1 日かけて、どんな神さまがどこから呼んで来られているかということの一つ一つ調べました。例えば、この一段高くなった 8 畳の部屋、ここではダイドコ [㊦] と呼



【写真 8-1】ダイドコの神棚



【写真 9】ダイドコの縁起棚



【写真 8-2】ダイドコの神棚調査の様子



【写真 10】裏出入口横の小祠

んでおりますが、2つ神棚がございます（【写真 8-1】）。正面にありますのがお伊勢さん、それから春日さんとか多賀さんとかというこの辺の有名な神社から、そして大峰山からも呼んで来ていますね。それから後は滋賀県の竹生島からも呼ばれております。どちらかと言いますと、大峰山とか吉野あたりの神さま仏さまがたくさん祀られているんです。常覚寺という吉野町のお寺の名前も出てまいります。それでなぜだろうかと思っていたのですが、ここでは13歳になると男性は「山上参り」といまして、大峰山参りをするんです。ですから八尾を含む河内という地域では、吉野の大峰山あたりとの行き来が結構盛んにおこなわれていたようです。そういう関係で、奈良の吉野方面の神々がたくさん祀られているんじゃないかと今推測をしているところです。

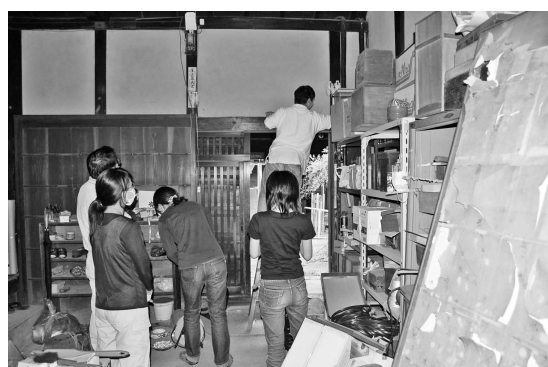
それから中心となる神棚の右手に、ガラス戸のちょっと小さな神棚がございます（【写真 9】）。あれはいわゆる縁起棚と呼ばれるもので、大黒さんや恵比寿さんが祀られております。他にはこの家では水天宮を祀っています。九州の久留米市と東京に本社がある神さまですが、どちらかから勧請したものでしょう。水天宮は河内では安産の神

としてお祀りされておりました。その神がダイドコに祀られております。それからあそこにはあびこ観音のお札が貼ってあります。これはご飯を食べる場所ですね。それから時間があつたら是非覗いてほしいのですが、裏の出入口の横 [①] に小さな祠がずらっと並んでいます（【写真 10】）。神さまの名前を調べますと、「正一位床下大明神」とかあるいは山の神とかに出てくるんです。正一位なんか大明神というのは、お稲荷さんの一種だと思うのですが、そういう神々がずらっと並んでおまして、裏口を守る役割があつたんじゃないかを思います。日常の暮らしの場を守る裏口の神さまがこの神棚です。

表側でたくさんの神さまが祀られているのがここ、玄関の入口 [①] なんです。信貴山とかお寺を中心とした札が玄関の内側に祀ってあります（【写真 11】）。案外見落とされるのですが、ここには意外と本音の神さまが祀られるんです。例えば、関西で言いますと、紙に「十二月十二日」と書いて逆に貼り付けてある家があります。あれは嘘か本当かわかりませんが、石川五右衛門が釜茹でになったのが12月12日だった、この日付を書いて逆に貼っておくと泥棒除けになるというこ



【写真 11-1】 玄関内側のお札



【写真 11-2】 玄関内側の調査の様子



【写真 12】 玄関上お札が入った箱

とで、家の玄関の内側に本音というのでしょうか、そういう神さまが、あるいは仏さまのお札が貼られます。この家もそういうお札を貼っております。

どうぞ表側におまわりください。この入口の上のところ [㊦] に箱がありますが、この中にいろいろな神社やお寺などからのお札が数十枚入っております（【写真 12】）。これはまさにこの家に悪いものが入ってこないようにということを期待して、祀られている神なんですね。ですから長屋門ではなく、母屋の玄関の裏表、あるいは裏口にも集中していろいろなお札が祀られています。これ



【写真 13】 神舎内の様子



【写真 14】 鍾馗像

は植田家がこの家で暮らす家族を守るということに非常に関心があった一つのあらわれであります。それから向こうの奥の方に屋敷神が祀られているんです。この家ではお稲荷さんが祀られております（【写真 13】） [㊦]。おそらく江戸時代の終わりから明治の始めにかけて伏見から勧請したと思われる。それからお稲荷さんのほかに、いろいろな神々が合わせて祀られておりますが、この母屋の妻側のちょっと高いところ [㊦] に、焼き物で作った 30cm くらいの鍾馗像が取り付けられています（【写真 14】）。京都などにお住まいの方は、鍾馗の焼き物が家のちょっと高いところにくっつけてあるのをご覧になったことがあると思いますが、鍾馗というのは、中国の唐の玄宗皇帝の夢の中に出てくる、いわゆる魔除けの神さまです。そ

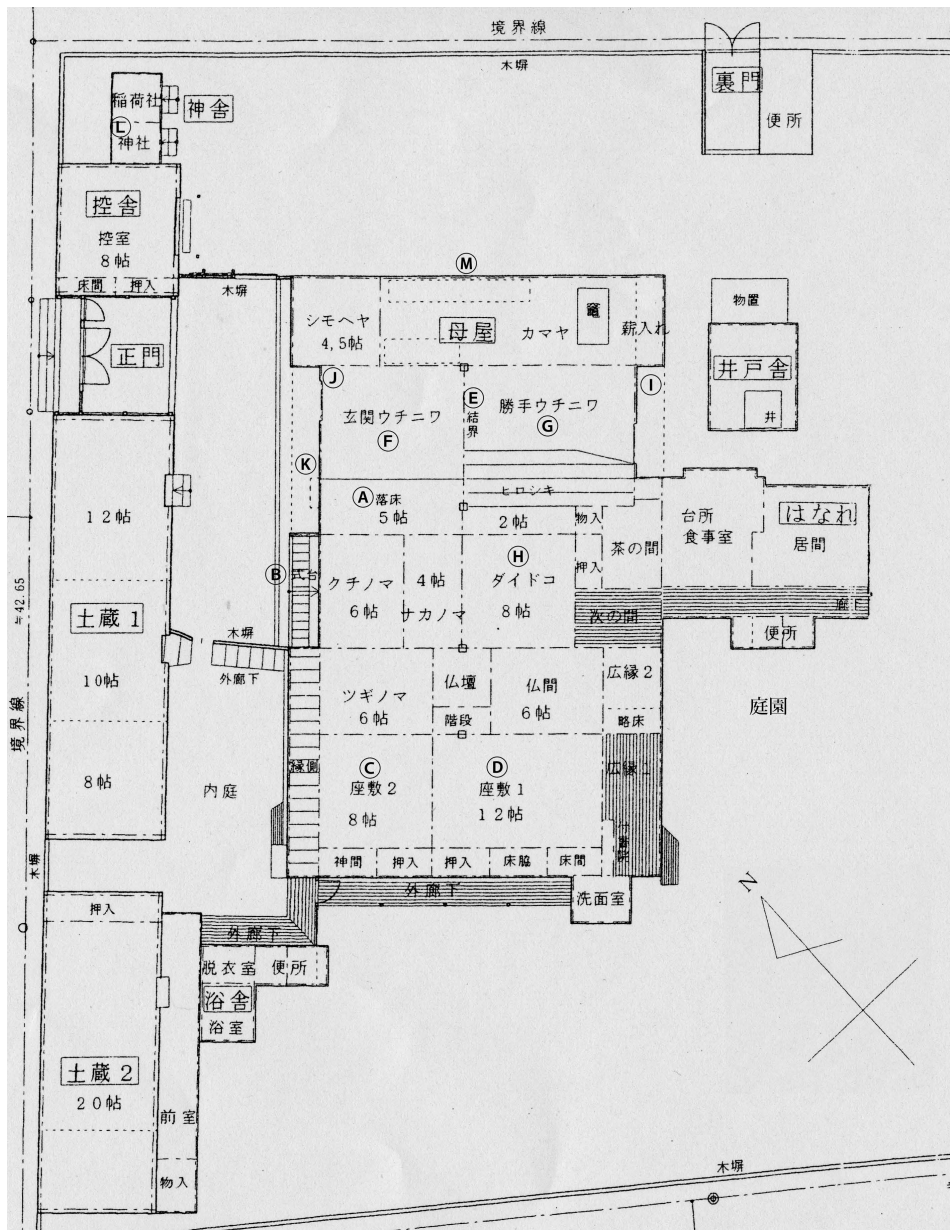
れが日本に入ってきました、町に住む町屋の人たちを中心に信仰が広がってまいります。こんなふうはこの家には必要なあるべきところに、神さまあるいは仏さまが祀られているということから、家族の精神的な守りを大変に大事にした、そういう家だったことがわかります。

先ほどちょっと申し上げたのですが、この家は今年の6月に市の指定文化財になっています。主な理由は、会所という公的な機能をもった建物が、敷地とともに残っているということに価値を認められたからでした。さらにそれに加えて、土間を中心にした、この家で暮らした人たちの昔の暮らしを感覚的に理解できる、そういう家がこの植田家ではないかと思うんです。幸いこの家は、別の場所に台所を新しく作られましたから、かま

どを含めた土間の部分が古い姿のまま残ったんですね。そういうこともありまして、日常的な暮らしの場、そして会所という公的な場、そういうものがこの植田家の中にきちっと空間的に区別をされてうまく残ってきた、その意味で本当に面白い貴重な文化遺産じゃないかと思います。この建物が八尾の地でずっと皆さんの手によって守られていくことをお祈りしたいと思います。ありがとうございました。

**森 隆男 (もり たかお)**

関西大学文学部教授。生活文化遺産研究プロジェクト研究員。専門は文化人類学（民俗学・民族学を含む）および民俗建築学。特に民俗建築には造詣が深く、人びとの生活のありようから日本の住まいの研究を進めている。



【図】 植田家見取図 (部分) (平谷建築事務所提供)